昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和五十九年　九月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十六巻　第九号
（通第四二二号）

目次

信仰を得たる人の実例……近角常観……(1)
〝ただ念仏して〟のたのもしさ(二)……池山榮吉……(6)
信仰書簡……菅瀬芳英……(11)
誓願不思議……井上善右ヱ門……(13)
慈光日誌抄……西元宗助……(15)
――仏徳讃歎――
無相師の御実感……岩崎成章……(17)
生死巌頭を照らす光……花田正夫……(21)

信仰を得たる人の実例

近角常観

此章において私の信仰の有様を聞いて、同じ信仰を得て、世の中を楽しく日送りして居る人が少くないが、その中で著るしい例を一つ申しましょう。一昨々年の暮、かの教科書事件が持ち上った時に、某君は山陽道を旅行中であったが、汽車の中で何気なく新聞を見ると「其人が縛に就く」云々の記事が載せてあった。そこで自分の身の上にも、図らず疑の雲がかゝって、自分を探して居るに相違ないと思ったから、直ぐに検事へ電報を以て「当地の警察へ出ようか、但しは東京の方へ出ましょうか」と問い合せた。ところが東京へ出よとの命令であったから、早々に警視庁へ出頭したら、直様鍛治橋の監獄へ送られた。当時此君は世界は道理で行けるものと思っていたので、自分は内に省みて疚しいところはない、頗る潔白で、無罪となるは勿論である、と期して居った。然るに他の人は段々有罪の宣告を受ける。此君自身も、多分は有罪になろうという形勢である。而して其実は少しも有罪となるべき事実は無かったのである。此君は、法理の上から色々と考えて見たが、何分にも裁判官が一方の証言を信じた以上は、容易にそれを打ち消すことが出来ぬ。友人が種々と法律書を差入れてくれたけれども、それらは少しも用を為さぬ。是非なく無念の涙を飲んで、無実の罪に堕ちねばならぬかと、心配でたまらぬ。しかのみならず、妻子を任地に置いてあったが、此の如き場合には、唯心配させるばかり。又自分の為には苦労を増すのみであった。実にむごたらしい情ないことに立ち至った。そこで此君も、頗る人間界の浅間しく味気ないことを悟ることになった。その上に、未決監では、本来地位身分のある人は、それ相応に待遇が違うはずであるのに、愈々入監して見ると一向にそんな訳でなく、自分も賭博や強盗の犯人と同じ取扱である。もとより待遇のよいのを望む訳でもないが、さりとて情ないことである。こうなって見ると、従来の学問も官位も、朋友妻子の親切も、一つも我身の慰めにならない、唯鬱々快々として、殆んど昼夜の区別がない。ここに至って、国家の法律は、譬えば大磐石の如く、個人がこれに向っては、手を以て大磐石を叩くようなもので、如何とも仕様の無いものである。絶対絶命、自分は実に不運であると覚悟した。かく覚悟はしたものの、それのみでは心の中が益々不平でたまらぬ、とても安心が出来ぬ。思えば思うほど益々不安に陥る。後には立っても居てもたまらない、唯悶え苦しむばかりであった。

私は此時、教科書事件で入監して居る人達に、私の『信仰余瀝』百五十部を差入れて進呈した。此君が煩悶苦痛の最中へそれが届いた。そこでこれを初めから読んで下された。この本の第一章は、私が苦んだ当時、忽然仏陀の慈悲を感じて、初めて其の苦しみの中から解脱することになった経験を、そのまま写したので、その大要は「人は如何に苦しむとも、如何なる境遇にあるとも、それには構わずに、只満身同情の涙をもって我身をながめ、我心の中の隅々までも能く知りぬいて、而も我等の咎過ちを問いたまわず、ひたすら憐れみ救うて下さる真実の朋友は、唯仏陀ばかりである。我等は、この仏陀の慈悲にすべて救いにあづかるより外、安心の道はない」というのであります。

此君は、これを初めは何心なく読んで行かれたが、読み行くに従って何だか妙な気持がした。日頃苦しんで〳〵居る間に、心の中に何か出来て居たが、それを云い現わす言葉がなかったのを、恰も釣針を腹の中に入れて、我が思うていたことを次第に引き出されるような心地であった。いかにも、此人生の上に於て、人を目当にしては何時までも駄目である。真の同情あるものは仏陀ばかりである。常に我等の身に添うて、如何なる時、如何なる場合にも、我がために真情を注いで下さる真実の朋友は、仏陀ばかりであると深く心に感じ来って、一枚読んでは泣き、二枚読んでは泣いて居った。

其時かたわらに一処に入って居った一人、是は賭博犯の者で、その人が此君の今の様子を見て、不審に思うて、あなたは其本を読んで、何故そんなに泣くのか、其本には何が書いてあるかと尋ねた。此君の答に、此本には自分の言おうとすることが皆書いてあるから、思わず涙に咽んだのである。自分が思うには、犯した罪が無くて入監してさえ不運であるのに、その上に心配をして、我と我が身体を傷うまでに自分を苦しめるのは、実に愚な話である。今までは身に覚えのないのに罪に陥るのは、実に残念であると、色々に世を恨み人を恨んで苦しんだが、これは全体我々の目当が間違って居たからである。我々は人間を力にすべきでない、我々の力になって下さるものは仏陀許りである。法律に対しては無罪であるが、仏陀に向っては自分はとても無罪とは云いきれない。人間同志ならば、或は無罪であ

る、潔白である、決して賄賂を受ける約束もしなかったと云えるが、さりながら心の中はなか〳〵に汚れてある。種々さまざまの罪を懐いて居る。仏陀冥鑒の前には、実に沢山の罪を持って居る。形の上では兎に角、精神の上では、自分は正に罪の塊りである。仏陀の前と思えば、とても無罪を云い張る勇気はない。もう弁解も弁護もあったものでない。又既に満身同情の涙で眺めて下さる仏陀のましますに、以上は、仏陀の御導きに任かせて、結果を気遣うには及ばぬ。して見れば今日よりは、唯自分の為すべきことを為して行くべきである、とこう云うて語った。此君の信仰は実に立派である。けれども未だ御縁が至らぬと見えて、この立派な信仰の話も、相手には左程深い感じを与えなかった。

此君が信仰に入って後は、一筋に仏陀の慈悲を喜びつつ、一層真面目に立働かれた。獄中ではとかく下のものに掃除などさせるのに、此君は毎日厳重に自ら掃除し、便所は数日に一度という規則なのに、前日に殊に清潔に掃除せられた。かく出来るだけは他の者のすることまでも自ら為し、力を尽して人の世話をする。他の者も喜んで、此君を兄の如く、親の如くに、親しみ敬うようになった。此君は、自分の胸中の煩悶が去って、洗うたようにスガ〳〵となって来たので、サアどうも他の身の上が気の毒に思われて仕方がない。自分と一処に居る賭博者が、殊更に不憫である。

そこでいろ〳〵語り聞かせた。此の者は或る処で賭博をして居た処へ、偶然立ち寄った。其所へ巡査が踏み込んで来たので、驚いて灯火を消した時に、其中のある者が、黒暗を幸に巡査を撲った。この男は運わるく其時捕えられた中の一人であったが、裁判所で調べられた時、裁判官が巡査に「ドンな者が君を殴ったか」と尋ねたら「顔にアバタのある者」と答えた。「然らは彼の者か」というて今の男を巡査に引合せたら「彼であります」と云うたので、此人は事実上撲ったのではないが、よんどころなく入獄することになった。此人はなか〳〵元気者で、獄中に居っても、一向平気であったが、其後ある日わが子供を連れて面会に来た。恰も其日どういう訳か、七ケ年の禁獄に処せらるることになるだろうというので、ガッカリと力を落して大層苦しみだした。其晩此君に向って懺悔して云うには「これは私が悪るかった。あの時は巡査を打ちはしなんだが、場合によっては打つようなことになったかも知れぬ。唯その時は機会が無かったから手を下さなかったのである。本来この如き場所へ近づいたのが悪かった。是はたしかに御戒めである。私もこれから改心致します」と、涙ながらに懺悔した。

これを聞いて、此君は、嗚呼人間には階級差別の無いものである。此人が思いがけなく官吏殴打の刑に陥るも、我

身が覚なくして収賄の罪に堕つるも、少しも異りはない。又彼れの苦しむも我の苦しんだも同様である。是等の点に至っては、学問位置の有無も何もあったものではない。仏陀の御前に於ては有罪も無罪もない。同じ急所を衝けば同様に痛みを感ずるのである。人間という人間は一様に皆、唯仏陀の慈悲に浴するより外に、安心の道はないと深く感じたので、黙って居られないで、更にその人に如来の慈悲の有り難いことを話した。そうすると此度は、彼も大に喜んでくれた。先方が喜ぶ程、いよ〳〵此君の胸中に満足の感じが溢れた。人生此上の幸福はない。監獄に入ったればこそ、此妙味を知ることが出来たと、大に喜んで見ると、獄中に居ながら非常に愉快である。丸で獄中ということを忘れたかの如く、何の苦もなく日を送って居られた。

かれこれして居る中に、昨年（三六年）の四月になった。突然此君の無罪ということが知れて出獄を命ぜられ、同時に文部省から本官に復して直に任地に赴けとの命令であった。出獄の時、自分の信仰を、典獄の藤沢正啓氏に話された。其時の此君の態度が、如何にも気高く美くしかったので、見るものが皆感じ入った。此時体重を計ったところが、獄中で而も麦飯を食うていたのに、入獄の当時よりも、大分に重量が増していたとのことである。藤沢典獄が小河監獄事務官にこの事を話された。小河氏は御存じの通り日本の司獄官の中心であって、殊に不思議の仏縁により、常に共々に仏陀の慈悲を喜ばして貰うて居ることゆえ、其事柄を私の方へ伝えられて、且つ私の方より此君に沙汰をしたので、直接に一度心中を披瀝したいとの事であった。其時私は、教科書事件で入監された人達から、沢山な手紙を頂いて居ったが、その中に、此君より三通まで頂戴して居った。そこで私は飛立つ計りに喜んで、見舞やら喜びやら感謝やら、自分の心に溢れていたものを其儘書いて差上げた。

然るに此君は、急いで任地へ赴かねばならんので、忙しくて寸暇も無いのに、態々私の求道学舎へ尋ねて見えて喜を述べ、翌日の日曜講話を聞いて、其足で任地へ帰って行かれた。それから又其年の夏に、此君と一処に居ったという人が求道学舎へ来た。何事かと思ったら、此人が裁判所で愈々判決という場になって、裁判官がその撲たれたという巡査に、たしかに此者が打ったに相違ないかと尋ねられたら、「多分その男かと思われます」と答えた。「かと思われる」では有罪の証拠にならぬ。此者であるか無いか明了に答えよとの事であったが、そこで巡査が暫く首を傾けながら、「此人でない」と答えたので、無罪放免の宣告となったという。その喜びの知らせであった。今まで仏陀を拝んだことの無かった人が、獄中まで追いつめられて、とう〳〵仏陀の光に接することになる、実に不思議の至りで

紙障子と入れ代りになりつつあるのは、よう〳〵現代のことであると思えば、念仏が意味のない声としてなりと、津々浦々まで行き渡っているという事実は、むしろ驚歎に値いすることかも知れない。

目指すものへの呼掛ということについて、私自身の経験したカナリヤの話を挿さんで見よう。

甲南の御影から、京都の紫野に居を移してから間もないことであった。庭に面した座敷の縁側の片隅に、鳥籠が一つ置いてあって、その中に一羽のカナリヤがいた。それは甲南から運んで来たもので、飼ってからもう二三年になる。或る日私は座敷から縁側に出て、庭を見やりながら右往左往あるいている。その時不図気がついてみると、私が籠の方に向って歩きだすと、カナリヤは急に動きだして、とまり木の上で、或は前後、或は左右に身をゆるがしたり、時には羽ばたきして前の金網につかまったりして、威勢のいい声で、チユーツチユーツと啼く。ハア今日はよく啼くわいと思いながら、籠の前で廻れ右をして、引返して籠から遠ざかって行くと、間もなく啼き止む。壁に突き当って、また転じて籠の方へ近寄って来ると、まえと同じように啼きだす。離れると止め、近づくと啼く。何遍繰返しても同じことだ。ハテ妙だと思って、今度は途中でさっと座敷へ

一般若多戦略結局　倭文の布も織るに用いる苧環　つゆ子作

は入ってしまう。すると啼声がはたと止む。一寸間をおいて座敷から縁側へ出ると、忽ちチユーツチユーツと啼き続けるこれまた倭文の苧環くりかえしても際限がない。そこで私は家人を呼んで、おい〳〵みんな来てごらん、このカナリヤは妙だぜ、人が見えると啼きだして、見えなくなるとだまってしまう。やってごらんと代る〴〵私のしたようにやらしてみると、可笑しなことには、少しも啼こうとしない。じゃ今度は私がと、やってみると、啼くのも止めるのも前とすこしも変らない。みんなはくやしがって、今度こそはとやってみるが、どうも仕方がない。カナリヤが人を見かけて啼くのは、私だけなのだ。

それ以来時々ためしてみたが、結果はいつもおなじことであった。そこで私は思った。この鳥籠は、甲南時代からずっと私の居間近くに置いてあったのだが、鳥はいつのまにか私を見覚え、私に馴染んで、私の姿の見えるたびに、私に声をかけるのであった。私の方では、そうとはさっぱり気がつかなかったのだ。このカナリヤは、私一人を呼んでいたのであった。曠劫多生のあいだにも、出離の業縁しらざりき。念仏を私への呼掛と、つゆ気がつかずにいたのと同じように。

念仏の声を、ただ耳にとめたというだけでも、その人と

救の力とを結びつけるえにしの糸が、早くも用意されたというのは、芝居に譬えて言えば、一とまず道具立が済んだという位のところで、その糸が或る程度の交叉状態に向って動き出すのは、いよいよ所作がはじまってから、言い換えれば、念仏についての考察なり、実践なりに、取り掛ってからのことで、それからその人、その場合に相応する内外の機縁次第、或は単刀直入、或は紆余曲折、それ〴〵固有の段階を経て、結び仕舞の大團円へと運んで行く。

「が、その中で、念仏のいわれを聞くことは聞いても、それについて多少の考慮を払っているというだけで、まだ実際念仏する、というほどにたち到っていない一類と、念仏に価値を認めてとにかく念仏しつつある一類とでは、最後の目標へのへだたりから見て、兎と亀のかけくらべ、必ずしもどちらが先に行きつくとも限らないが、前者の前途なほ遼遠なのに較べると、後者の地点からは、もう山が見えている。念仏の出る出ないを界として、前者は単に素見の客であるのに反して、後者は既に謂わば力との直接交渉の圏内に立入ったものと見られる。」

ここはもう道具建がすんで、いよ〳〵役者が登場した段である。或者は思案投首、しきりに念仏について工夫を凝らしている。或者は殊勝気に、珠数をつまぐって称名に余念がない。いずれも銘々の持役に応じた仕打をしている。全体を通じて念仏の一大道場と看做せば、書きだす廻り灯籠のシルエット。真剣なもの、不真面目なもの、熱烈なもの、微温的なもの、陽気なもの、陰気なもの、頭燃をはらうようにあせり狂うもの、焼いた鳩の飛んでくるのを、空頼みするやうに呑気に構えるもの、煩悶懊悩して身をうねらすもの、感悦髄に徹り落涙千行なるもの、至心信楽已を忘るるもの等々、枚挙にいとまがない。念仏に対する敬虔さの濃度を具体化する映像が、オンパレードで現前する。

相手かわれど主かわらず、同じ一の念仏が、相手次第で、それ〴〵異なる取扱いを受けるというのも異なことだが、その取扱いが必ずしも一定不変のものでなく、時の経つに従って、それからそれと転化し、推移して行く結果、今甲某の立場は、自分のかって通ってきた跡、今乙某の辿る地点は、自分のやがて行き着くべき先、といった工合に、自他互に後になり先になり、時を異にし、若くは同じうして、いつか一所に落合うべき傾向を契機するのは、更にまた妙といわなくてはならない。

こうした継起運行のいきさつについては、これからいささか述べて見たいと思うが、私は先ずここにその前提として、念仏の一大特質、反復性を挙げたいと思う。念仏には

繰返される性向がある。どうしてそうなるのか、その理由はしばらく措いて、とにかくそうあるのは事実である。だから念仏の道具立、即ち、えにしを結ぶ糸として、力と人との間に、念仏が置かれたということが、ただそれだけで、既にゆゝしき一大事なのである。それだけの事実を端緒として、結び仕舞の大團円に運ぶ可能性が、多分に与えられているからである。

念仏は反復する。凡そ念仏を称える程の人が、後にも先にも一遍こっきりで、ぴったり止めてしまうということは殆どあるまい。念仏は一旦称えられたが最後、連続的にされ、間歇的にされ、多かれ少かれ続けられるが常で、多いのになると一日何万遍というのさえあるそうである。

念仏は初一声を音頭として、あとはひとりで繰出される衝動がある。これが一つの原因でもあろう。念仏は口癖になり易い。口癖の念仏、一寸聞くとたよりないようだが、実はまことによく出来たもの、これも一つの善巧方便とさえうべなわれる。

口癖になった念仏の所有者でも、無論、称えようと思って称える場合もあるが、そんなつもりもなく、不図口に出して仕舞うこともある。中途でハッと気がついて、それなり止めることもあろうし、そのまま続ける折もあろう。その結果、時には現に自分の考えたり、為たりしていることを、肯定し確認することもあろうし、不認したり是正したりすることもあろう。或はまた新な思いつきを、早速実行しようと決心することもあるだろう。要するにこうした場合、称える人の対念仏の思想態度に相応して称えられた念仏が、大なり小なり、幾分の効力を発揮せずには居ないのである。

念仏はその反復性によって、折節考えるべく与えられた公案みたいなもので、いやしくも念仏を耳にし、若くは口にする人は、その念仏の意義について、思案をめぐらすべく、余儀ない仕儀に置かれている。

さて人と力との関係、対念仏の態度如何は、これを最終の目標—信楽獲得—への距離を規準として測定すると、先ずザッと二つに分類することができる。一つは、念仏についてまんざら考えて居ないのではないが、まだどうも念仏が出て来ない一團。も一つは、念仏について或る価値を認めて——反面から言えば、自己の欠陥の補充を念仏に求めて——とまれかくまれ念仏しつつある一團。

〝真実の信心はかならず名号を具す、名号はかならずしも願力の信心を具せず〟念仏が出るからといって、きっと

本当の信心があるとは限らないが、本当の信心があれば、念仏は出ずにはいない。念仏が出ないというのは、信心の真偽、正否を検する上には、甚だ不利な徴候の一つである。

念仏が出るからこれでよい、と片附けるのも許されないが、念仏がまるきり出ないようでは、てんで話にならない。それはまだ謂わば広義の信界の手前の境涯で、そのあたりは一面に、深い濃い雲霧が立籠めて、行方も知れない。これに引替え念仏の出る地点は、もう信界の縄張内になるので、そこからはもう山が見える。或は遠く淡く墨色に、或は近く青々と、呼ぶが如く、招くが如く見えている。

山が見えるというのは、も一つ言い換えて、手応があると言っても良い。釣でいおうなら、鮒だか、鯉だか、何だかわからないが、垂れた糸を通して手首にふれる、あの一種微妙なふるいを感応するので、そうした手応は、静かに念仏の糸を垂れたおぼえのある人でなくては、恐らく想像もつかないものであろう。

「力との直接交渉は、念仏を通じて行われる。その進歩の程度にも、見方に依っては矢張り幾多の段階があり、転化もあろうが、特に際立ったそれの三つがある。念仏を目的達成の一助と見るのが其の一で、目的達成への努力の焦点とするのが其の二。」

売買の取引が、通貨の媒介によって行われると同じように、救の力と人との掛合、交渉は念仏を通じて行われる。念仏は売買における通貨だ。財布の口をかたく締めたままのひやかし的態度では、念仏の直取引は行われない。力との直接交渉は、唯一の通貨であるところの念仏を以て支払方法とする条件の下にのみ成立する。

直接交渉の成立するところ、そこはもう信界の領域である。が、そこで見受ける信的状態は、どれもみな同じである、一つである、同一念仏無別道故などと、あっさり片附けてしまうことは許さない。むしろ信仰転成の上から見て、きわめて重要なかわりめが、彼此照応して、くっきりその相を露わすのを見逃してはならない。——つづく——

信仰書簡

菅瀬芳英

四苦八苦とはお経の中に説かれているが、其中の愛別離苦と云うことを此度身に沁んで感じられたことである。このようにつらい思いをせねばならぬなれば、親子の縁を結ばねばよかったのである。今となって考えて見れば、親子の縁を結んだのを怨めしく思う様になってくるのである。

なぜ生れたのであろう、なぜ死んでくれたのであろう、思えば思うほど考えれば考えるほど愚痴が起って、どうしても思いあきらめることは出来ない。思うまいと思えば思うほど思いがむら〳〵むら〳〵起ってくるのである。

平生から法を聞いて居るのであるから、此様な気の弱いことではならぬと、幾度も思い返そうと力んでも駄目である。こうなると泣くより外に道がない、これが泣かずに居られようか。どうしても心が承知しない、唯無意識的に涙が出て、泣くより外にてはない。一夜も二夜も泣きあかし、三晩も四晩も泣き、夜もひるも泣きどおし、いっそ泣いて〳〵泣き続けたいものである。

ここに到りて思い起し気付かして貰うのが大悲の親様である。貴女様が子供のために泣いたよりもなお〳〵長く泣いて御座るのが大悲の親様である。我等どものために、久遠劫来より泣きづめが親様であったと、此度の事で愛別離苦の幾分かを知らして貰うたのであるが、大悲の親様は、御自分の身に早くよりお知り遊ばし、御自分のつらい思いより四苦八苦の迷いの中に我等が沈んで居るのを御覧遊ばして慈悲を垂れて下されたのが大悲の親様である。私どもが苦しんで居るとき、一緒に苦しみ、私どもが泣くとき一緒に泣いて下され、また私共が喜ぶとき一緒によろこんで下さるのが大悲の親様である。南無阿弥陀仏、々々々々々々、々々々々々。

先日ある処の奥様が子供を亡くされて非常に落胆して日々愚痴をこぼしては泣いて居られたのである。その家は神道で、奥様の里は禅宗であるから、宗教と云う様なことはすこしも考えたことがないのであるから、余程困難して居

られたのである。ところが其人の友人に法を聞いて居る人があって、宗教を聞いたらよかろうと云うことから、其人の宅に招かれて法話をしたのである。

ところが始めてのことであるから話すことが随分むつかしかったが、前に書いた様に、泣いて泣いて泣きつくしなさい。その泣いた涙の上に、此様に泣いている自分より長々泣いて居って下されたのが大悲の親様であると話したら、非常にそのことが胸にはまり、如来大悲の親様に気づかれたのである。

其人の言われるには、自分は宗教を聞いたらあきらめよ、思うな、愚痴をこぼすな、忘れよと云われることであろうと思うて、余程覚悟して居ったのである。あまり子供に別れたのがつらいので、充分に決心していたのに、どんな覚悟も決心もいらないで、自分と同様に泣いて自分が泣いて居るよりもなお〳〵泣いて下されるのが大悲の親様であると聞いて、真実の同情者は此世の中には大悲の親様であると気付かして貰うて、始めて胸が晴れた様である、とのことであった。南無阿弥陀仏々々々々々々、南無阿弥陀仏、々々々々々、々々々々々々。唯だ〳〵この上は御恩の称名より外に要のないことにさせて貰うたのである。南無阿弥陀仏々々々々々々。　歎異抄九章に

「仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり」

とある。我等どもの迷夢中にあって苦しんでいる煩悩具足を御承知遊ばしての上の大慈悲がありがたい。我等どもの往生は仏様の方よりお定め下されたのである。迷中にありながら迷いを知らないもの、種々なことに出遭わしてもらって、如来様の御慈悲に気付いたのである。人生において人生上の事が身にこたえ、終に如来の真実がわが身に引き受けられることになったのである。御文に、

「不可思議の願力として仏のかたより往生は治定せしめたまふ」　五の十

とある。仏のかたより我等の往生をきめて下されたのである。仏様から先に往生を治定して下さったから、疑い深い我々があなたにおまかせすることが出来たのである。

「如来わが往生をさだめたまひし」と蓮如上人が、如来がわが往生を定めたまいしとおよろこびなされたのである。如来わが往生をとのお言葉が真に力強い、南無阿弥陀仏々々々々々々。南無阿弥陀仏々々々々々々。

親様のお慈大悲がありがたい、唯だこの上は南無阿弥陀仏々々々々々々。々々々々々々。

飛鳥一二美様

誓願不思議

弥陀仏のみちかひゆえに天地の
　おのづからなる寂けさに入る

これは白井成允先生の遺詠ですが、この詠を誦しつゝ、私は誓願不思議ということをしみじみと思うのであります。

不思議という言葉は、誓願不思議、名号不思議、仏智不思議、大悲大願の不思議等、いろ〳〵と語り表わされるところですが、例えば『歎異抄』の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて……」という場合、不思議の誓願がましまして、その誓願力によって往生を遂げさせていただくのだと感じていました。

不思議とは人間の思議思考を超えた遙かに大いなる真実を仰ぐ言葉ですが、これを真如法性についていうならば、宇宙の究極の真理は心もおよばず言葉もたえた不思議の境でありましょう。その一如の世界から形をあらわし御名を示して阿弥陀仏となりたまい、衆生を摂取しましますのですから、弥陀の誓願力はまたわれわれの思議を超えたものであり、たゞ[illegible]が私の心に宿[illegible]世界の客観的根拠[illegible]れて背後にあるものでのであると知られてきたの仏智不思議の真只中に[illegible]貫いてこの私[illegible]議の智恵光を[illegible]

これはラジ[illegible]らぬはわから[illegible]えば」と。こ[illegible]取の真只中に[illegible]る趣きが身に迫[illegible]

信心成立の根拠[illegible]思議の仏智を思念することが、誤りであるというのではありませんけれども、それはえてして[illegible]ですが「わか[illegible]の中にありと思[illegible]現在この身が大悲摂[illegible]の不思議を嚙みしめていられるのです。

はからいの画に陥る危険をはらんでいます。『末燈鈔』に聖人は「仏智不思議を信ぜさせたまひ候ひなば、別に煩はしく兎角の御はからひあるべからず候」と申されています。

人間の思考や思議は解ったようでも、おぼつかないものを残します。そのおぼつかない思いを更に追求すると結局、解ったようでも解らないというところに堕在する。総じてはからいというものはそういうものです。しかし現在只今の不思議の真実に値遇してみると、それは最早や一つの動かしようのない事実に出遇うのですから、はからいは自から力を失って問題ではなくなる、それを先の病む婦人は、「わからぬはわからぬでよし」と転捨する心境が恵まれたのでありましょう。わかろう〳〵と模索していたはからい心が、仏智不思議に照らされて解消したのです。それは即ち円満完全な最早や何言う必要もない「まるまるのお慈悲」の只中に己れの全分が今あることを見出したことであります。その事が即ち『歎異抄』に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて……」とある真意だと思います。

聖人が『行巻』に乃至一念の大行を転釈され、最後に、「念仏は即ち是れ南無阿弥陀仏なり」と結帰され、そして自ら湧き出る感激を「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転ず」と告述しておられるところにも、現在只今この身が光明の広海に浮ばしめられ、至徳の風に浴している風光を嘆じられたものでありましょう。その確かなる現在の信認こそが「[illegible]明土に到りて大般涅槃を証し普賢の徳に遵[illegible]広大無比なる輝かしい未来の展望となって[illegible]であります。浄土真宗が未来だのみの宗教[illegible]ことは、聖人に対し全く申訳なき至極であ[illegible]いうのも現生正定聚ということをたゞ観念[illegible]きたが為ではありませんか。

初めにかゝげた白井先生の遺詠に「弥陀仏の[illegible]えに」と詠じ出され「天地のおのづからなる寂けさ[illegible]と誦じておられるのは現在只今の不思議な恵みへの[illegible]あります。この奇しき寂けさ（寂静の統一）に浴する[illegible]は、どうしてこうなるのか、こうなったのか解らな[illegible]だ仏法を聞き本願に遇うことによってこうなった。「みちかいゆえに…」と仰ぐ外に何の理由も[illegible]だから不[illegible]先生の[illegible]姿婆に[illegible]れま[illegible]しま[illegible]の中[illegible]

誓願不思議

井上善右エ門

弥陀仏のみちかひゆえに天地の
　おのづからなる寂けさに入る

これは白井成允先生の遺詠ですが、この詠を誦しつゝ、私は誓願不思議ということをしみじみと思うのであります。

不思議という言葉は、誓願不思議、名号不思議、仏智不思議、大悲大願の不思議等、いろ〳〵と語り表わされるところですが、例えば『歎異抄』の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなりと信じて……」という場合、不思議の誓願がましまして、その誓願力によって往生を遂げさせていただくのだと感じていました。

不思議とは人間の思議思考を超えた遙かに大いなる真実を仰ぐ言葉ですが、これを真如法性についていうならば、宇宙の究極の真理は心もおよばず言葉もたえた不思議の境でありましょう。その一如の世界から形をあらわし御名を示して阿弥陀仏となりたまい、衆生を摂取しましますのですから、弥陀の誓願力はまたわれわれの思議を超えたものであり、たゞ〳〵不思議と仰ぐ外はない。このような思いが私の心に宿っていました。つまり不思議の誓願を信心の世界の客観的根據と眺めていたのです。

しかし誓願の不思議ということは、そのように現在を離れて背後にあるものではなく、常に現在前してましますものであると知られてきたのです。現在只今こそ誓願不思議仏智不思議の真只中にあるのがこの私です。汚乱の煩悩を貫いてこの私に誓願は摂取の御手を垂れ、仏智はその不思議の智恵光をおくりとどけておられます。

これはラジオで聞いた或る病篤き婦人の歌ですが「わからぬはわからぬでよし　まるまるのお慈悲の中にありと思えば」と。この歌を口ずさみますと、現在この身が大悲摂取の真只中にある、その摂取光中の不思議を嚙みしめている趣きが身に迫るように感じられるのです。

信心成立の根據に不思議の仏智を思念することが、誤りであるというのではありませんけれども、それはえてしてはかゝいの画に陥る危険をはらんでいます。『末燈鈔』に聖人は「仏智不思議を信ぜさせたまひ候ひなば、別に煩はしく兎角の御はからひあるべからず候」と申されています。

人間の思考や思議は解ったようでも、おぼつかないものを残します。そのおぼつかない思いを更に追求すると結局、解ったようでも解らないというところに堕在する。総じてはからいというものはそういうものです。しかし現在只今の不思議の真実に値遇してみると、それは最早や一つの動かしようのない事実に出遇うのですから、はからいは自から力を失って問題ではなくなる、それを先の病む婦人は、「わからぬはわからぬでよし」と転捨する心境が恵まれたのでありましょう。わかろう〳〵と模索していたはからい心が、仏智不思議に照らされて解消したのです。それは即ち円満完全な最早や何言う必要もない「まるまるのお慈悲」の只中に己れの全分が今あることを見出したことであります。その事が即ち『歎異抄』に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて……」とある真意だと思います。

聖人が『行巻』に乃至一念の大行を転釈され、最後に、「念仏は即ち是れ南無阿弥陀仏なり」と結帰され、そして自ら湧き出る感激を「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転ず」と告述しておられるところにも、現在只今この身が光明の広海に浮ばしめられ、至徳の風に浴している風光を嘆じられたものでありましょう。その確かなる現在の信認こそが「速に無量光明土に到りて大般涅槃を証し普賢の徳に遵うなり」という広大無比なる輝かしい未来の展望となって開かれているのであります。浄土真宗が未来だのみの宗教などと評されることは、聖人に対し全く申訳なき至極であります。それというのも現生正定聚ということをたゞ観念的に見すごしてきたが為ではありませんか。

初めにかゝげた白井先生の遺詠に「弥陀仏のみちかひゆえに」と詠じ出され「天地のおのづからなる寂けさに入る」と誦じておられるのは現在只今の不思議な恵みへの感嘆であります。この奇しき寂けさ（寂静の統一）に浴することは、どうしてこうなるのか、こうなったのか解らない。ただ仏法を聞き本願に遇うことによってこうなった。それは「みちかいゆえに…」と仰ぐ外に何の理屈もないのです。だから不思議はそのまゝ恵まれた事実の感嘆であります。先生の『招喚の声』という詩の一節にも「慶しい哉　身は娑婆にありつつも　既に浄土の光耀を蒙る」と讃じておられます。自分には一物もない、たゞあるものはこの身を照しまします光耀である。信心とはまさにこの不思議な事実の中に立つ実感ではありませんか。

慈光日誌抄

――仏徳讃歎――

西元宗助

さる七月の下旬は北海道に、八月の初は南の鹿児島へと、人々の好意に甘えて忙しく巡る。このように記述すると、一見、元気で爽壮と感じられましょうが、実は疲労甚しく鹿児島空港に降りた時はもう体調をくずしておりました。

もとより仏縁の深い師友の方々との出会いで、それぞれに一期一会、まことにかたじけないことでありましたが、しかし省みては、聖人の「是非しらず邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなけれども名利に人師をこのむなり」の御述懐のお言葉は、痛切にわが身にひびくものがありました。殊に謝礼の金一封をいただくとき、罪悪深重・煩悩熾盛の思いは切実で、ただただ南無阿弥陀仏でございます。そうして今も。

○

お前は地方の寺院に招かれて、いったい、何を語っているかと、もし問われるならば、なんとお答えすることであろうかと自問してみる。すると即座に「されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」(歎異抄後序)と仰せの聖人の仏徳讃歎のお言葉が自ら応答されることであります。

そういえば、あるとき、足利浄円先生の御在世中、仰せでありました。説教ということは、厳密にいえば、われらにあっては、ありうることではない。説法し説教し給うのは、如来にてまします、善知識でましますと。われら煩悩具足の凡夫は、ただ聴聞して仏徳を讃歎させていただくばかりでございますと。

○　○

しかし、お前は、いかに仏徳を讃歎するかと、さらに問われるならば、私は、わたしどもが御仏前にてお勤めするとき、最後に必ず誦する〝廻向文〟――殊に善導大師の帰三宝偈の末句、

願はくは此の功徳を以って　平等に一切に施し
同じく菩提心を発して　安楽国に往生せん

のお言葉を、近頃しきりに念頭に想い浮かべて念仏申すことでございます。

けだし、この廻向文の「功徳」というのは、歎異抄第一条に聖人が、「しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに」と仰せの、お念仏のことであることは申すまでもありません。そしてここに「同じく菩提心を発して」の菩提心と申すのは、われら煩悩具足の凡夫が、本願の念仏をわが身にいただく「他力の信心」のことに外ありません。

まことに親鸞聖人が、ご生涯をかけて明らかにせられたことは、御主著『教行信証』の信巻「菩提心釈」等にお述べのように、「本願力廻向の信楽」――即ち他力の信心とは、如来の真実心、如来の大菩提心を、わが身にたまわることでありました。

このように仏徳讃歎の極みは、ただ南無阿弥陀仏と、われら菩提心なき煩悩熾盛の凡夫が、他力の大菩提心をたまわって、「世のなか安穏なれ」と、全世界一切衆生を共に、戦争なき絶対平和の、自由と平等の安楽国に往生せんと、その実現を願う身にしていただけることであるのであります。これは大変なことでございます。

○　○

ただ今、金沢からの帰途、「雷鳥」号の車中にあります。そして七十五歳になった私の両腕――熊襲の子孫を想わせる毛深いわが腕をなでさすりつつ思わせられること。それは、この身は父母からいただいたものであるということ。しかしわが両親は又その親から、その身を享けついだものであることは、いうまでもなく、それを無限に溯及すると、ついには天地開闢の原始曠劫にいたるということ。いや、この私を取り囲む山川草木の国土も亦、無限にさかのぼれば天地開闢の曠劫につながる。のでありました。

このことに想いが到ると、天地の原初を、現実の私とは、深い深い関連のあることが直観されて、善導大師のかの、「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなし」と仰せの、我が身が、思い知らされることでございます。されば又、この「出離の縁あることなき」身が、今、あいがたくして値遇うことをえて、無縁の大慈悲――本願の念仏に摂取されてあることの慶びを、あらためて押しいただいて仏恩を謝する次第であります。

いよいよお盆入りの日、これをつつしみて誌す。

無相師の御実感

岩崎成章

無相師は再度の長い入院療養中、その書信に曰く

現実生活の上でいろ〳〵困ること、いやなこと、病気になること、病苦の劇しいこと、等々によって自身の業、煩悩の底なしに深いことを痛感せしめられることは、御廻向の真実信心の「機の深信」によるといただかれ、それにつけても、ただ念仏せよ、称我名字の仰せよりホカなしと仰せのままにただ念仏せしめられることは、これまた御廻向の真実信心による「法の深信」のオカゲゆえと思い知らされることであります。御廻向の信心の実際は実生活上においてはかくの如くこの身に即して体感せしめられると、今暁は特に思い知らされたことでした。そしてお念仏が毎日、日夜、煩悩のムネに濁悪のクチにたび〳〵浮んで下さつて「ただ念仏」「ただ念仏」ばかりでしたが、その智慧の念仏さまのオカゲにて、「お念仏は声の親様である」と体感されるようになって、今までよりグッとこの身に親しく頂かれるようになり、まことにありがたいことです。

この濁悪のこの身、この心、このクラシと寸時もはなれたまわぬ大悲無倦常照我のお照らし、常照、この如来さまがお声となってあらわれて下さるる——こんなにも親しい、身に近いというより、この身、この心、このクラシに即した如来様とは今まで体感出来ませんでした。まったくイノチは法のタカラなりで、まことに〳〵「業なり恩なり」であります。省みて「信心安心」も実際にいくら上手に説いてくれても「教義」では駄目で——アタマだけ、知識的理解だけになってしまって——生きた信心、安心のことは結局先徳僧侶の「語録」によるほかなし。歎異抄も聖人と唯円房の「語録」といってよいと思います。

大量師のオサトシに〝機と法との二つの実がある、実に死ぬと、実に生きると云うことで、一往ではわからぬことじゃ〟と。これは機の真実は「実に死ぬ」と云うこと、法の真実は「実に生きる」と云うことである。これには善導様の「前念命終、後念即生」、前念にいのちが死ぬ、後念にいのちがいきる、死ぬと生きるは同じこと、説法次第で前後で云うけれど、一念同時でありましよう。闇が晴れると夜が明けるのと同じように「闇が無くなる」と「明るくなる」とは事実は一つ。自力というか、自己をたのみにする心がつゆちり程もなくなったら本願がたのめる。それでなかったら頼めない。若存若亡は死にきっていない。凡夫の三業は生死出離についてはまるっきりあかん、と。これが死ぬと云うこと、自力をたのむ心がすたった、その時他力に生きる、一つで別でない。機の深信が先きにあって法の深信が後と云うのではない。機の深信と法の深信は一枚の紙のうらおもて、後先きがない。一枚の紙の表からは、法の深信、裏から云えば、機の深信である。これをなんとか手に入れさそうと聖人はせられるのではなかろうか。結局本人が時節到来して、ああそうかと頂かれなければ、そばからは出来ぬことであるが、別に凡夫自身の力では「実に死んだり」、「実に生きたり」することは出来ぬことで、実に死なしむるも、実に生かしむるも、ひとえに、他力廻向の真実信心のオハタラキによらねば出来ぬことであるから、凡夫が自分の力でそれをしようとしないこともちろんである。凡夫は生死出離については全く無能無力だから、出来もしないことをしようとすれば出来ない、出来ないと悩まねばならなくなり、出来たらしく思うたら自分免許で出来た〳〵と思う、それはマチガイ。

又、等覚寺松野正遵師の「機と法の二つが見えるばかりすてゝとろうとするはハカライじゃ」と仰せられるが、機と法を見るような力は、凡夫にないから、ワレ〳〵凡夫の力（反省や内観）で見ようとしても見えはしない。またすてる力も、とる力もない。それまた他力廻向の真実信心のお力、おはたらきに依るほかないから、ワレ〳〵凡夫は自分の力で機と法を見ようとか、自力を捨てて他力をタノモウとかしないことである。ただこれはこうだ、アレはアアだとお聞かせいただくのみである。お前は「極重悪人だ」とお聞かせいただいたら「自分ではソレホドわからぬが極重悪人なのだナア」と「唯称仏」のホカないぞよ。「唯称仏」とお聞かせいただいたら「唯称仏」といただき、極重悪人唯称仏と、ただスナオにお念仏申させていただく、ナンニモワカラヌ私は、極重悪人唯称仏の仰せのまんまに、ただ〝ナムアミダブツ〟と、スナオに申させて頂く、これならいたってラクである。そのことがわかってもわからなくてもいい、ただ仰せだけ、お聞かせのままスナオにいただくだけ、ただナンマンダブツ〳〵の外はない。

又、大量師の仰せに〝このままとは悪心だけのこと、信心ばかりは本真物（ほんまもの）にならねばならぬと思うが、よく〳〵聞けば本真物とて何があろう。このうそいつわりのゴマノハ

イぞと聞き開かれたら一心帰命の外はない〃

香樹院師曰く〃そのままのお助けじゃ〃と〃同行、このままのお助けですか〃曰く〃そうじゃない、そのままだ〃と。

この場合は、そのままと云うのと、このままとは違う。ある時は、このままとそのままと同じような使い方をしている場合がある。この場合はどうだろうかと考えぬと受取りにくく間違いをすると思う。この場合のこのままとは、悪心だけと云うことは、煩悩のうつりかわりからいえば、よい心のおこっている時もそのまま、悪い心のおこっている時もこのまま。然しこの場合は凡夫のわが身の自性についてこのままといっている。そのままのお助けといわれた時のこのままは、色々の煩悩のことでなく、自分の自性のこのまんまは悪心だけ、外に何もない。よく〳〵お知らせいただけば、本真物(ほんまもの)とて私の本性には何もない。〃よろづのことみなもてそらごとたわごとまことあることなし〃本真物は何もない。〃このいつわりのゴマノハイぞと〃自分というものはまことらしいような心のうごくときもあれば色々あるけれど、その本性を押えてみると、〃うそいつわりのゴマノハイ〃悪心以外に何もない。信ずるの、任せるの、たのむの、こそばいの、懺悔するの、せんのといったところで、チョットも本真物ではない。一時の出来ごとだけのこと、うそいつわりのゴマノハイぞときひらかれたら、そういう自性がはっきり見えたら一心帰命の外ない、ミダをたのむほかはない、唯念仏より外ないと云うことであろう。

だから悪心とか色々いうても煩悩の一つとしての悪心を云う場合と、自性を云う場合とあるから、そこをよく聞きわけ、読みわけんと受取り間違い、本当のことがいただけんと思う。

吉藏同行の〃弥陀は凡夫のウブを受取る。善知識はウブにして渡すが役、私はただ凡夫の性のウブのまま死んで行くのじゃ〃と、ウブとは自性のすがた、機のありのままのすがたであり、善知識はありがたい、ありがたい処においておかんと、そのありがたい底はありがたいであろうけれど、ほんまのありがたいというものは、何もないお互である、と云うことを善知識がはっきり知らさなんだら役がすまん。ありがたい安心でとどめておいては、ありがたいとかこそばいとか、求めるとか色々いっても、その底へ入ると皆うそじゃ。殊勝気なありがたそうな仏法的なものは何もない、全く無仏法の自分じゃとはっきり機のすがたを知らせるのが善知識の役割り。〃ミダは凡夫のキジを受取る、善知識は凡夫をキジにして渡すが役、この凡夫の私は、ただ凡夫の性のウブのまま死んでゆく〃それで安心して死んでゆく。呼吸が困難になると、ありがたいもこそばいも念

仏も何もかもすっ飛んで、ただ苦しい〳〵と凡夫の素地だけになる。そのキジのまんま死なして貰う、キジのまんまを如来様がお引受け下さる。如来様は凡夫の表面をどうのこうのと云うているのでない。凡夫のキジの助からん、何としても仏法気などつゆちり程もないところの、うそ、いつわりのそれを如来様はそれに眼をつけて助けんと思召したちける本願だから、一番大事なことを吉藏同行が云ってくれていると思う。

庄松が臨終間近かに、同行がよろこんでいるかと思えば、よろこびどころか、苦しくてたまらんと、それがありがたい私は、臨終のきわまでありがたく感謝したり、念仏したり、よろこんだりして死ぬのは妙好人にまかせて、私はですよ、凡夫のキジのまんま、苦しい〳〵で死なしていただくと云う御縁の方がありがたい、それが私にあう。そう云う風なひどい病苦にあわないで、そこまでの凡夫のキジは全くつゆちり程も仏法気がないと云うことを知る人は至って少ないので、そう云う御縁になか〳〵会えぬ。その点は大量師の御縁はありがたい。大悲無倦常照我は、何かを御縁にして全く仏法気ない、全く助からん自分を知らして下さる、それがありがたい。そう云う機のすがた、これは大量師が一番はっきり云ってくれている。今の処もそうだが、〃我れ仏法を知る身となったと思うが早や、我が機を見失うたのじゃ〃、何が仏恩を本当に知る気なんかありましようか、仏恩報謝と云うても云うても、教義の上ではそれでよろしかろうけれど、自分と云うものをおさえ、仏恩を知ったと云う風にたま〳〵思うことはあっても、さて本当にお前知っているかと云うことになると、何も知っていない、ケロりとしている、一寸もわかっとらん。〃我れ仏恩を知る身となったと云う本心を、お前ホントかねと押してみると、信心のハタラキで、更らにその実がない、たまにその心が起ったのは、如来様の御加えの仏智で思わして頂くわけで、その下にあるのは固有の迷心じゃ〃と、ここが大量師のありがたいところで、ここまでの御縁はめったにない。どこどこまでも底のない、ナントモナイ「我が機」の迷心を見逃して下されぬ。スグに「この者のお助け」と「お助け」をクサイモノにフタをするような甘い御縁はついてゆけません。この「我が機」のクササをどこまでも追求し下さる処に大量師のありがたさがあります。この点はとても「教義」では知れぬトコロです。庄松のナントモナイは実に深い永劫に助からぬ我が機を知らして下さる、大量師とともに。この機にいたり届いてあらわれて下さっているのが、「今のお念仏」です、この外にわが道はない。

ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。

生死巌頭を照らす光

花田正夫

かって私が岡山の医学生の頃、入院した患者が全快して周囲の人々に祝福をうけて、満面の笑顔で元気に家路につく人もあるが、裏門から金色の霊柩車に迎えられて、音もなく消えて行く人々に度々接した。その度毎にふかく省みさせられたことは、医学の限界を越えた人々のこころのよるべであった。

長塚節が喉頭結核で、余命一年との宣告を受けた時

生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしは常の時なりき

我がいのち惜しと悲しといはまくを恥じて思ひしはみな昔なり

と、自身が生死巌頭に立っての述懐である。然し誰しもそうなりたくないし、また考えたくないことながら、この一大事は一人々々直面せねばならぬし、誰にも代って貰うことも、一緒して貰うことも出来ない。仏の仰言る通り、独生独死　独去独来である。この身に何時までも力になって下さる方こそ、如来の招喚の声である。

「世間虚仮、唯仏是真」とは聖徳太子の御家庭にあって常に繰返された金句である。歎異抄の総結文に「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきに、唯念仏のみぞまことにておはします」と親鸞聖人も述べられている。

池山榮吉先生の最後のこの世のことばは

「何も残るものはない、何も残るものはない

ただ念仏だけが残ってくれる

ただ念仏だけが残ってくれる

偉いこったよ、有り難いこったよ。」

であった。先生の仰言る念仏は、そのまま如来のお呼び声である。有り難く念仏が申せるとか申せぬではない。いよ〳〵病苦が迫ってくれば、お念仏も申せないが、如来のお呼び声「一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん」が常にひびいて来るのである。

蓮如上人は

一人でも行かねばならぬ旅なるを弥陀にひかれて行く

ぞうれしき

と随喜讃仰されている。

私自身このことを身にしみて知らされた経過について述べよう。

三十五の時、肺結核で二年ほど静養したが、それで今まで鉄筋コンクリートのように思っていた身体にもひびがはいるんだなと知らされたが、自分の死については考えもせず、上手に治療する方法ばかりを考えていた。

次に敗戦により日本人から歌も笑いも消えて、衣食住を専ら求めていた。その時、歎異抄と聖徳太子の十七憲章を掲げて、共々に仏光を仰ぎたいと願って走り廻っていた時、狭心症の発作を繰返して、名大病院に入院し、心電図によって心筋障害と云われ「ひびのいった茶碗も大切にすれば長持ちするから大切に」との注意をうけた。そこで外の仕事を全部ことわって、小屋に静居して長持ちさすことを願ったが、自分の死は念頭になかった。

然し六十五の時、血尿が続き、膀胱腫瘍とのことで、市大病院で手当をうけた。自分の年齢と云い、病気といい、いやでも自分の死が前を塞いできた。そうなれば、大海の嵐の中に浮沈する孤舟の身で、遠くの浜辺で灯火を掲げながら私に呼びかけて下さるが、それはありがたいことながら私の力にはならない。「妻子も財宝も身に添うものは何一つない」唯暗闇に一人立って、淋しさ、名残り惜しさで心はつまされるばかりであった。

ここにまことにおそまき乍ら私自身の死が問題になりはじめ歎異抄の第九章の後半が異様な力をもって心にしみ、「名残り惜しく思へども娑婆の縁つきて、ちからなくして終るときに、彼の土へはまいるべなり。いそぎ浄土へまいりたきこころなきものをことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存知さふらへ云々」

この摂取不捨の御手のたのもしさに念仏させていただくばかりである。その念仏の中から思わずつぶやいたのは、「死もまた我なり」の一句であった。生死一如とはよく聞いてはいるが、私自身の情意の上では、死んでたまるかと死を押しのけ、生きている自分だけを認めるという具合であった。ところが、よろこぶところもなく、いそぎ浄土へまいりたきこころなきものを、かねてしろしめし、ことにあわれみたまう大悲大願のふところに摂められてみれば、かねて清沢満之師の「吾人は生のみがわれにあらず、死もまた我なり」と云われたことも、成程々々とうなずかされ、死

の闇に永遠の黎明の光を仰ぎはじめた。
幸にも病気を縁として、一番感銘の深かった「よくなれる側でなく、よくなれぬ身を照護して下さる光」をいただいて、何よりも尊い御縁を恵まれたのである。
池山先生は、
たのまるるただ念仏のわれにあり　さるべき業はさもあらばあれ
と信嘗され、七里恒順師は、
火と水のその中道を行けや人　喚びます人の声をたよりにと讃仰されている。
近角常観先生は、脳溢血でたおれられたが、昭和七年十一月発行の「信界建現」に次のように述べられている。

○

回顧せば昨年、求道会館落成記念日たる十一月三十日において、はからずも脳溢血にかかり、危く一命を失わんとしたるに、九死に一生を得て一周年の今日再び仏前に詣で、皆様にお目にかかることを得たるは、まことに冥加にあまる仕合せと存じます……。
私はその当時、病状険悪、いよ〳〵最後と取りつめたる時、一念心頭に浮かびたることは、本願自然によりて自分はこのまま参らしていただくことは、一毫も疑う余地は無いが、定めて子供等や信者の方々が悲しみ落胆して下されることであろう。出来ることなら、生きられれば結構と思うたことであった。
その時、自分ながら存外覚悟がよかったと思い、周囲の者も同様にみとめたようであった。しかしながら段々快方におもむき、あとより熟々と考えて見るに、本音とは大いに違ってあることを発見した。自分は思いきりがよかったが、子供等や信者の方々のことが気にかかると思うたは、矢張り畢竟自分自身の変形に過ぎなかった。歎異抄の
「浄土へいそぎまいりたきこころなくて、いささかの所労のこともあれば死なんずるやらんと、こころぼそくおぼゆることも煩悩の所為なり」とあるは、是処じゃ。
其時の心持を口ずさみたのが
「正しく入出門に立って、忽ち煩悩の為に逸す」
の詩句であった。大層殊勝そうに、子供等が、信者の方々がと云えど、畢竟長々親しめる苦悩の旧里は捨てがたく名残り惜しく思えども、娑婆の縁つきて、力なくしておわるとき、であった。若しやこの時、御縁がつきたならは彼の土へまいりて、無上涅槃のさとりを開かして下さるであろう。
この如く娑婆にあらんかぎりは最後の一念にいたるまで煩悩具足の凡夫である。仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたが誠にありがたい。若しこの仰せ

がなかったらば、けなげに賢善精進の相を現ぜねばならぬであろう。しかるに虚仮不実の私を、仏かねてしろしめして下さればこそ、他力の悲願はかくのごとき我等がためなりと知られて、往生はいよ〳〵一定と、安心させていただくことが出来るのである云々。

○

私自身、昭和十六年九月に「幾度か夢みし師なり、今日会わんとす」求道会館にお参りさせていただき、御不自由なお身体をたすけられながら壇上に立たれてお話し下さり、会館の後の部屋でお目にかからせて頂き、お疲れの中を十分間ほど親しくお話し下さったのち、あとは常音に聞いて下さいとのことでお別れした。その時先生筆の短冊に、
跡戻り〳〵して辿るらん　甲斐なきことに心迷ひて
とあるのを拝し、心に深く刻まれた。甲斐なきことを甲斐なきことと知りながらあきらめもならず、またしても愚痴のやまぬ身を、飽くまでもお呆れのない御真実をいよいよ仰がせていただいている。
更に、昭和二十七年九月に滋賀県の御自坊での近角常音先生の御法話を大字三右ヱ門さんの筆録されたものを追記させて頂く。
「私の兄貴、最後亡くなります時にも、平素の兄貴と何等変りませんでした。
その兄貴だとて、一時はまことに殊勝気に振舞うたこともありました。病気発作の始めでした。
ニコニコと笑って、極めて自若として居る、どうしたのかと尋ねると、お前今極楽の東門が開いて大変なことである。ぼんやりして居られぬではないか、など申し、お医者さんにも姿を正してお礼申したりなどする。
こうしたことも一時はありましたが、そういう鮮やかなことで乗り切れなくて、最後になって詩をつくりました。うまく行かなかったその詩を紙に書いて私に渡しました。兄貴は在俗のまま、そのままの姿で、一寸も殊勝ぶったところがありませんでした。
最後の時、誰か大声で私を呼びますから急いで病室に馳せつけて見ますと、喘息状態でしたから、喉に痰が溜ってすでに絶息していましたが、そのうちにも僅かに唇が動いておりました、それが最後でした。その唇の動きはお念仏を称えていたのではないかと思われました。
私に「死ぬのはつらいものだよ、お前もその覚悟をしておれ」とかねて申して居りました。」

あとがき

暑い寒いも彼岸まで、と申しますが、目下残暑の中にあって涼風を待つことしきりであります。

近角常観先生の懺悔録から続いて頂きました。一人々々の信の歩みは、尊い聖書であります、そこに身をもって教えられることが多いことです。実験科学を提唱したパスカルの歩みは科学界に大きな灯火を掲げました。

池山先生の一文は念仏にはぐくまれて行く尊い信の旅を知らされます。久遠このかた子故の廻向わたし一人をかなおもひ、と御子息の病床で信味されたことも思い出されます。

菅瀬芳英師の信仰書簡から特に愛別離苦を見舞われた一文を頂き、誌友の方々の同じ悲しみを持たれる人々におとどけいたしました。

井上先生の誓願不思議の一文は、不思議の妙味を述べて下さいました。不思議とはわからぬということでなく、その事実に遭うてそのままうなづかせて頂くことと知らされました。

西元先生の仏徳讃仰を拝読して、臼杵祖山老師の遺詠、「大いなるめぐみの中にめぐまれて、めぐみも知らでみめぐみに生く」を誦し、随喜いたしました。

岩崎成章師の、木村無相師の法信によって、機法二種深信の徹底味を襟を正していただきました。大病の中にあって、かえってそれを縁とされて、衆禍波転の妙趣、申し上げることばもありません。ナムアミダブツナムアミダブツ。

私は医学生の頃から、医学の限界を越えた人の心のよるべ、それは私自身の問題として生涯かけて導かれております。

おわび

八月号の私の拙文のうち二十一頁と二十二頁とがアベコベに印刷され、お読み下さるのに御迷惑おかけいたしました。又近角常音先生の題字が小さい活字となりましたこともあわせておわび致します。

九月の十六日の例会は大抵開かせていただけると思います。一期一会ということが身につまされることであります。同年の木村無相さんを失ってことに切実に感じますことであります。

定価　半年　八〇〇円（送共）
　　一年　一六〇〇円（送共）
編集　名古屋市南区駈上一丁目十四―二十九
発行人　花田正夫
電話　八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷
　　坂部光雄
発行所　名古屋市南区駈上一丁目十四―二十九
　　慈光社
振替口座　名古屋六―一〇四七〇番
郵便番号　四五七

慈光　第三十六巻第九号　昭和五十九年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可